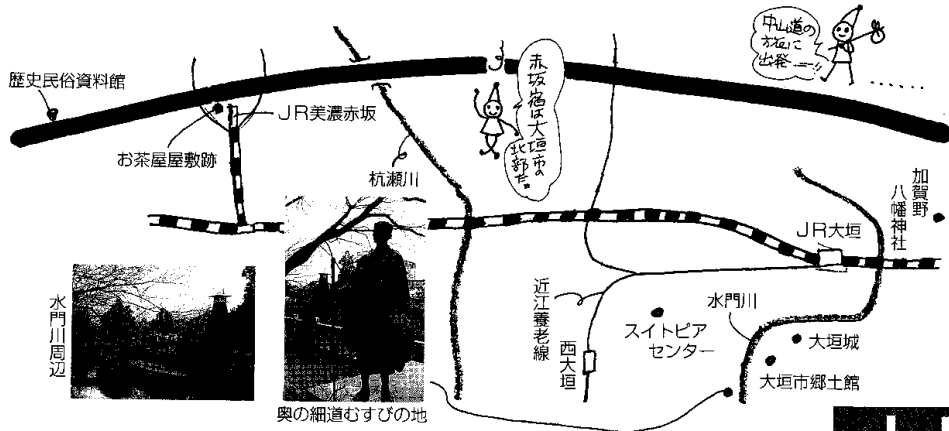


風にそそわれ

中山道水めぐり



奥の細道むすびの地

大垣

奥の細道結びのスイトピア

奥の細道結びの地大垣は、日本列島のほぼまん中に位置する人口十五万の都市。市内には、揖斐川、杭瀬川、水門川など十四の河川が流れる。また、揖斐川水系の自噴帯があり、至るところから地下水が湧き出している。大垣は、豊富な水を持つことから、「水都」と呼ばれている。

水と深いかわりをもつ大垣の歴史や文化を生かしたまちづくり、それが「スイトピア」だ。そのきっかけは、昭和五十七年、国の水緑都市モデル地区整備事業の指定を受けたことだった。当時、生活排水が流れ込む水門川は、非常に汚れていた。かつて芭蕉が川を下って桑名へ抜けたという誇りの川は、すっかり見る影をなくしていた。

市では、かつての水門川をとりもどし、市民と水とのかかわりを復活させるために、川の護岸を整備し、川の各所に噴水や遊歩道、モニメントを設置し、植栽を施した。この取り組みに呼応するかのよう、市の青年クラブが自主的に始めた水門川の清掃はやがて、市民全体へと広がっていった。それにとまない、市民のなかから水を生かしたまち

江戸時代の五街道のひとつである中山道は近江の守山から江戸の板橋まで六十七の宿場があった。

なかでも、近江から美濃へ抜ける道は鈴鹿の峠を越える東海道よりも重要な京と江戸を結ぶ幹線であった。

古代からの幹線として

人とモノが風のように往来し、町がひらけてきた。

そして、なにより水の豊かな道だった。

伊吹山と霊仙のあいだを抜ける街道沿いには名水が多い。

水郷に囲まれた水の都大垣から西へ。

垂井、醒井は、その名のおり美しい水を喚起させる。

米原の番場を抜けて摺針峠に立つと

きらめく淡海に迎えられる。

初夏の中山道は、風にそよぎ水に映える道だ。

づくり活動も生まれてきた。水門川でおこなわれる

「水門川鯉まつり」(五月)や「水都まつり」(八月)

は、大垣の風物詩として定着してきた。訪れた人々が舟下りを体験できる「奥の細道むすびの地 舟下り芭蕉祭」(四月)は、かつての水運を歴史情緒豊かに再現するものだ。

また、市域を縦断する杭瀬川では、上流を「ゲンジボタルの里」として地元住民が保存会を結成。草刈り、清掃活動、カワニナの放流を行っている。ほかにも、伏流水の流れ出す「曾根の池」では花ショウブの里づくり、自噴水の井戸がある「加賀野八幡神社」では、澄んだ湧き水のあふれる所にしか棲息しないハリヨが保護されている。

大垣では、行政と市民、なかでも大垣の未来を支える若者が活動の原動力になっている。先頭完成した「スイトピアセンター」は、水都大垣の自信と活力の象徴であるとともに、水の都の市民の金字塔だ。スイトピアとは、まさに、水とともに生き、水の文化を共有する大垣市民が創る水の理想郷なのである。

(遠野泚郎)

- 1) 水門川鯉まつりでは鯉の放流がおこなわれる
- 2) 舟下り芭蕉祭で水に親しむ市民
- 3) 市民全体に広がった清掃活動



番場

ばんば

耳をすませば水の音が聞えてくる

国道21号線と重なったり交わったりしながら、つかず離れずの関係にあった中山道は、河南の集落を過ぎるあたりから南へそれます。醒井宿から約一里、番場宿に到着です。

蓮華寺は花の寺

番場の宿は、山合いに延びています。東番場のなかほどに、「史蹟 蓮華寺」境内陸波羅控題北条仲時及将士墳墓地という大きな二本の道標が立っています。その間の道を行くと、つきあたりにあるのが蓮華寺です。

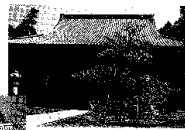
春の蓮華寺は、ツツジとサクラが織りなすピンク色の重なりで圧倒されそう。ツツジが終わるころには、アジサイの白や薄むらさきが境内を彩ります。珍しいボダイジュの花が咲くのも六月です。

秋は紅葉がとてもきれい。池の回りを回遊する道や「もみじ溪さんぽみち」と称される小道は、赤や黄色の屋根におおわれます。冬には樺の大木が真っ赤な花をつけ、やがて梅の老木ががすかな香りを放ち、日陰の斜面にシヨウジヨウバカマが群れをなして春を告げるのです。

いつの季節に訪ねても、花が迎えてくれる心やすまるお寺ですが、入口の道標にもあったように、ここは六波羅探題の北條仲時公ら一行四百三十余名のお墓があることでも知られています。本堂右手奥の斜面には、



忠太郎の像



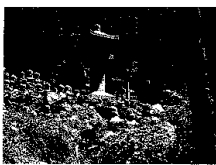
蓮華寺本堂



斉藤茂吉の歌碑



入山料は箱の中へ



北條仲時らのお墓（蓮華寺）

おつかさんを訪ねる旅に出るところでしょうか、傷心のまま故郷に帰ってきたところでしょうか……。幼いころ別れた母親を、険の裏に思う忠太郎の表情は、三度笠の下ではっきりわかりませんでした。

滝と城を結ぶ水の道

中山道の東側には、高速道路の下をくぐって山へ向かう小道が何本かありますが、そのひとつに「青竜の滝」を示す案内が立っています。林道を三キロ近く登ったところにある小さな滝は、山の中に涼しげな水音を遠慮がちに響かせています。そばには、色褪せた鳥居が立ち、お地藏さまも祀られています。昔は雨乞いを祈願する太鼓踊りが行われていました。いまも、「番場史跡顕彰会」の人たちによって、毎年七月二十四日に青竜の滝まつりが行われているそうです。

また、中世、番場の山中には、室町時代に築城された鎌刃城という山城がありました。眼下に中山道を望む軍事的な色彩の濃い城だったようです。

山城では水の確保が重要な課題になります。そこで、青竜の滝の落ち口に岩盤をくり抜いて「水の手」をつくり、ここにたまった水を城の中に取り入れる仕組みがあったのではないかと考えられていました。この三月、西番場の歴史を知り明日を考える会の人たちは、考古学者とともに城の主郭に向けて引かれた水路の測

仲時公を囲むようにぎっしりと小さな五輪塔が並んでいます。ツツジの咲くひなたと同じ境内だと思えないほど、押し黙った空気が立ち込めている場所です。

番場の忠太郎のお墓も

長谷川伸の戯曲「険の母」の主人公である番場の忠太郎は、その生まれが、この番場と設定されています。そんな架空の人物なのに、蓮華寺には彼の「お墓」まであるのです。忠太郎生みの親・長谷川伸のほか、舞台で「険の母」を演じた長谷川一夫、片岡千恵蔵らの名前が入った石柱に囲まれた五輪塔がそれです。

その左側、石段の上にお地藏さまが立っています。その名も「忠太郎地藏尊」。離れ離れになった親子を巡り会わせるだけでなく、あらゆる縁が結ばれるお地藏さまです。お互いが拝み合う素直な心が大切、と書かれていました。

番場宿に沿うように、その東側を名神高速道路が走っています。高速道路の「米原」を示す看板は「合羽からげて三度笠」の図。この絵のモデルが番場の忠太郎で、彼の出身地がこの道の下にあるということ、ここを通る人たちは知っているのだろうか、と、ふと思いました。

国道21号線沿いには、忠太郎食堂という食堂があります。お話を聞きたかったのですが、残念ながら定休日でした。駐車場のそばには、空を仰ぐ忠太郎の銅像。

量にあたりました。そして、全国的にも珍しい水の手跡を確認したのです。

馬も喉をうるおした山の水

西番場のはずれの桜並木が満開です。その向こうに延びる坂道は、摺針峠へと続く道。高速道路をせわしなく走る車を横目にえちらおちら上り坂を進んで行くと、小さな祠が目に入りました。すぐ横には、山から流れ出たのでしよう、笥の先から水が飛沫をあげて落ちていきます。この水で口をすすぎ、時に向かつて歩を進めた人も多かったことでしょう。水を受ける御手洗には「泰平水」という文字が読めます。

番場の宿で、「鎌刃城はあのあたりや」と教えてくれたおじさんは、「昔街道を通った馬も、あそこで水を飲んだんやろな。あのお地藏さまも、ずっと前からおられたみたいや」と、言っていました。

街道には、いつの時代も音が聞こえ、人がいました。馬が車に代わった現代。人馬のざわめきが車の騒音に代わっただけなのかもしれません。番場宿の上を通るコンクリートの道は、なにか異質な物体に思えます。ひとときでも車が通らない時間があれば、家々のすき間や木々の間から、いろんな音が聞こえてくるのは、……。そんな気のある番場の宿でした。（香）

「泰平水」となりにお地藏さま
「米原トンネル」の標識には
マスの絵

「米原」の標識には忠太郎の絵

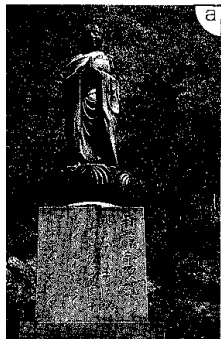
このあたりを小摺針峠とよぶ

西番場から小摺針峠への道



青竜の滝

鎌刃城跡



a) 蓮華寺境内にある忠太郎地藏尊

b) 青竜の滝への道。遠くに見える山に鎌刃城があった。

c) 「泰平水」

